
真剣で最終に恋してみろ！

カイギネス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で最終に恋してみろ！

【著者名】

Z3607T

【作者名】

カイギネス

【あらすじ】

何故か小説を読もうに投稿してしまったみたいなので（言われるまで気が付かなかつた・・・）。

手始めに、

突然だが、俺には前世の記憶がある。

因みに前世では大手企業の営業マンだった。

頭が可笑しいんじゃないかと思われるのも癪だつたから他の誰にも言つてないけど、少なくとも俺が今いるところは前世の記憶とイマイチ・・・というよりかなりズレてる節がある。

例えば町の名前、俺の現在住んでいる川神市は無かつたはずだ、それに武術だなんだつてのはそれ程メジャーでなかつたはずだ、少なくとも安易に他人に向けていいものじゃなかつた、つか向けた時点で通報ものだし。

それがここにじや普通に街中で喧嘩、俺から見たら殺し合いレベルを繰り広げているし、俺の今通つている川神高校なんて決闘とかいう制度まである、正直言つて想定範囲を遥かに逸脱した事態だった。

しかも髪の色がどこぞのアニメだ！…と突つ込みたくなるような色の者までいる、てかこの学園には身嗜み検査とかはないのか？つか茶髪とかならまだしも金髪とか白とか銀とか・・・地毛か？それ地毛なのか！？と問い合わせたくなるような色の奴らまでいる。まあ俺も人のこと言えないんだが・・・。

あと一番の疑問なんだが　　女子のあのスタイルの良さ、

そしてあの異様なまでの戦闘能力の高さはなんだ？

謎だ。そして何故比較的に男子の方が運動能力が低いんだ？別に男女差別してるわけじゃないが色々無理があるだろう！

まあそんな学園に通つて しかも前世の記憶がある俺が可笑しくない筈がないんだが、それは後々語るとしよう。

兎に角俺は基本スタイルは一般ピーポーを貫いているから絡まれることはないが、一番警戒すべきはその女子の中でも好戦的否、獣的な奴等だ。

あれは駄目だ、俺の本能が警告してる。あれと関わると絶対に後悔すると、兎に角なんにしても俺とどうやっても分かり合えないような人種がこの世界にはわんさかいるわけだ。

その中でも風間ファミリーと呼ばれる集団の最年長、川神百代はヤヴァイ。なんたって最強だなんだと呼ばれてるんだからな、目をつけられたらそれこそ他の者達にも芋蔓式に目をつけられかねない。

まあ絡まれたところで万が一にも負けることはないだろう。だが俺は絡まれたり戦わされるのが嫌いなだけだ、あんな綺麗な人達に絡まれて嬉しくない筈はないんだがそれでも戦いだなんだなんてのは遠慮願いたい。

兎に角言えることは俺は転生者という部類の人間で、転生先の世界は生活水準や技術力等は同レベルなものの何故か武道を習うもはやコイツ人間？と言いたくなるような奴等（主に女）がいるし、街中で戦つても許容される変な世界で、そして俺はこの世界でも以上に異端な存在として生まれ落ちてしまったということだ。

登校風景それは、悪夢

さて、君達は朝といつものに対して何を思い浮かべるだろう。

一日の活力源となる朝食？朝日？「学生ならまた学校か」とかどううか、俺は

「悪夢」

である。

朝、登校中の俺の視界内に入るはある女性に突っ込んでいった不良共がその数秒後、空へフツ飛ぶという漫画のような光景だ。

前世の世界でこんなことやろうものなら傷害罪及び器物破損、下手すればいやしなくとも殺人未遂か。あとはニュース等で『生身で大の男を拳で吹き飛ばす化け物女登場！』だろうか。

まあ高校までの違つ町に暮らしていた時にも女子でコイツ人？みたいな人間はいたさ、喧嘩上等で喧嘩常勝の女がいてその女が纏めるヤバげなレディースがいたもんだ。

しかしたつた一人で大の男（十人以上）を拳で怪我一つ負わずに上空に吹き飛ばし積み上げる女はいなかつた、つーかいてほしくねえよ。

設備とか学力平均値などだけで判断しこの高校を志望、試験に受かつて意気揚々と登校してみればこれだ。といつてももうここにきて一年も経つた今ではそれも見てもなんとも思わなくならねえわな。

とか言つてる俺も十分、というかこの世界でも最上位に食い込む異常な人間の一人だ　　俺には前世の記憶がある、そして何の因果か特異な体で生まれた。

橙色の髪、人間が出来る範囲のことなら知識さえあればちょっとの努力でほぼ全ての事が可能、単純な筋力のみで鉄をへし曲げ岩を粉々にすることが可能な肉体。

ここまで言えれば分かる人もいるかもしれない
シリーズという小説の登場人物にして単純なスペックでは他の追随を許さない、『人類最終』にして『橙なる種』想影真心である。　　戯言

奇しくも俺のこの世界での名も想影真心だ。今は黒に染めてるので分らないだろうが、それでも生まれて間もない頃は苦労したもんだ、力加減を間違えるとペンや食器を折碎き友達と遊ぶ時全力を出そうものなら全員からハブられるし。まあ人間って言うのは良くも悪くも異端は嫌うということだ。俺からすればこの世界にいる五割まではいかないにしても結構な割合の人間が異端であり異常だけど。

まあ昔は俺も調子に乗ったもんさ、人外クラスの力を持つて、しかも転生できるなんて狂喜乱舞したもん。けどやはりこの世界でも人類最終のスペックはダントツだつたらしい、誰も彼も俺と対等な人間はいないし下手をすれば化け物扱い。一回だけだが誤つて人を殺しかけた事がある。

当然といえば当然だが辛いもんは辛いのだ。俺は一回車に轢かれた事があるのだがその時ほぼ無傷だったのを知ったの親は俺を見世物にしようとした。無論それを知った俺は両親をもうこれでもかといふくらいボツコボツにしてやつた。そのせいで縁を切られたが親戚

に引き取られ、今はちょっとしたマンションで一人暮らし。

兎に角俺は元一般ピーポーのせいいかこの力を持つたのは嬉しいが、それでも無駄な争いはごめんなのだ。しかし親を叩きのめす時に気づいたんだがどうも俺は他人の死や傷付く姿に対し酷く冷めた反応しか出来ないようだ。前の世界じゃ目を背けたくなるような光景でも平然としてられるのは、おそらく俺の肉体が関係してるんだと思う。だから俺は人を傷つけるのが嫌だ、闘つたりすると自分の異常さ加減が分かるし、自分本位な考え方だが別に誰かに迷惑をかけるわけじゃないんだからいいだろ？

説明が長くなってしまったが、今は俺は登校中。俺の登校時間には様々な光景が見られる、例えばさつき言つた女が男共を上空へ吹き飛ばすという光景だ。しかもこれが日常だというのが恐ろしい。

不良達が女

川神百代に挑んでいくのだがそれをよく川神百代が吹き飛ばす、叩き飛ばすというものだ。何故かそれを見ようと寄つてくる観客までいるし・・・・それよりあの不良達は何故懲りもせず大怪我を負いに行くんだ？Mか、そうかMなんだな。

「まあ俺には関係ないか

「何がですか？」

「うお！？」

いきなり声をかけられて驚いて振り向くと、そこには友人の妹、優菜ちゃんがいた。

この子は友人の家に遊びに行つた時に出会つて、その時何故か大層懐かれたのだ。因みに十四歳中学一年生だ。

「おはようございます、真心さん」

「シコリと笑いながら俺に向かつて挨拶をしてくる優菜ちゃん、後ろの乱闘騒ぎには興味がないようだ。

うん、この子の笑顔を見ると心が癒されるね。

「おはよう優菜ちゃん、法規は？」

法規、優菜ちゃんの兄で同じクラスの俺の友達だ。

「兄さんは先に行つてしましましたよ」

「そりが、じゃあ俺も急ぐとするかな」

「そうですか、では」

「いい子だねえ、まつたくあの子の爪の垢でも飲ませてやりたいよ
た。

「いい川神百代と不良集団を一瞬見る、といつよつ無意識に睨ん

でしまつた。

「まだ時間あるからゆっくり行こうかな」

とりあえずあの人間兵器もとい、川神百代と不良、観客を視界に入れないようにして俺はコソコソと学校へ向かった。

その途中、馬車を猛スピードで引くメイド、忍足あずみとそれに乗りながら高笑いをしながら登校する同級生の九鬼英雄を見て軽く鬱^{うつ}になりかけたのは毎日の事があるので割合する。

爽やかな朝 + 鬱陶しい人＝決闘・・・決闘！？

二年C組 俺が所属しているクラスだ。

このクラスは比較的に武道とかは程遠い人間が大半を占めている、それに俺の数少ない友達もいるし。おそらくだけど学校側が意図的にそういう風に分けたんだろう。こういう配慮だけは感謝感激だ。

「おはようさん、真心」

「ああ、おはよう法規」

机に突つ伏していた俺に話しかけてきたのは俺の学校での数少ない友人、天吹法規てんぶきほうきだ。

コイツには色々世話になつて、入学当時から他の奴等から浮き気味で精神的にも参つていた俺を救つてくれたのは他でもない法規だった。

最初は俺も突っぱねていたが最終的に俺が根気負けして一緒に行動するようになった。今では俺達は無一の親友だ。

因みに天吹ってあの天吹正規序とは何の関係もない、がこいつかなりの身体能力と特殊なスキルを誇つて、それにちょっとだけ俺がアドバイスしたときもあつたせいか恐らく今の法規では並の奴らじやかなわないだろう。俺もそうだし法規もそうだがこの世界には機というものが存在しそれを保有している。まあ俺はそんなに使用しないしな、戦いはただそれ切羽詰まつた状況もない

し何よりそれ以上にスペックが高すぎてそんなもの使つたらどうなるかわかつたもんじやない。

因みに他にいる友人もちょっとした奴らだったりするが、まあそれは今度と言つことで。とりあえず戦闘能力は常軌を逸しているという事だけは言つておいた。多分試合なら分からぬが死合なら確實に俺の友達たちに勝機があるだろ。

まあ好んで戦いを俺に挑んでくる奴らじゃない・・・・まあ挑んでくる奴もいるがいい奴らだから。何故か憎めない、いい奴らだ。

「相変わらずやつれでいるね」

「言い返せないのが悔しいが、これに関しては高校卒業まで治る気がしない」

「いつそ全員の目の前で大暴れでもしてみたらどう?・スッキリするかもよ?」

「冗談、大体俺が本気で暴れたらこの学校灰燼と化すぞ、しかも万が一にもそんなことしないって分つて言つてるだろ」

「違わないね。ああそれと最近川神一子がところ構わぬ喧嘩もとい、決闘を仕掛けてきているらしいよ?君は平凡を田指すべしに厄介事に巻き込まれるときがあるから気を付けなよ」

「わあつてゐよ、大体今まで絡まれなかつたんだあと一年くらい乗り切つてやるぞ」

「まあがんばりなよ、僕もなるべく味方してあげるからさ」

「なるべくじゃなく全面的にしてほしいんだが」

「あはは、そうだね。やつをやつもいりつよ」

ガラガラ

「全員席に着け、HRを始めるぞ」

「おつと、先生が来たみたいだ。席に戻るよ」

「おつ」

あれからHRと午前の授業が終わった、特に何かあったわけでもないでのその辺は割合をさせてもらつ。

現在は朝食を食べ終わり読書中だ、読んでいる本は人の心の掴み方、実用書だな。

ガラガラ！

「失礼します！」

突然扉が開きクラスの中に入ってきたのは、髪を後ろで束ねた利発
そうな娘だった。

あれ、あの子確か、川神一子か？半年位前に風間ファミリーやその
他の俺が進んで関り合いになりたくない部類の人間を紀貴にピック
アップしてもらつたから覚えている。

それにしても何しに来たんだ？朝法規がいろんな奴に決闘を申し込
んでるって聞いたけど、このクラスってそういう武術とかやつてる
やつ少ないだろ。つかいなんじやね？法規と俺以外。俺らは人前
で見せたことないから知らないだろうし法規は言わずもがな。

つつても俺は武術というより護身術と幼い調子乗つてた頃に習得し
たネタワザとくらいだが。

つてあれ？何で俺達の方に向かつてくるんだ？イヤマジ来ないでお
願いだから。

なんて心で叫んでいると川神一子とかいう女は俺の机の前まで來た。

「君が想影真心ね！私は川神一子！！私と勝負しなさい！！」

と。のたまつた、ついでに俺の机にバン！…とワッペンを叩きつけ
た。

「いや確かに俺の名前は想影真心だけど? 何で君と勝負しなきやなんないんだ?」

「アンタ登校の時、お姉さまの前を通り過ぎる時気配を消してるのでしょ、それに今日お姉さまを睨んでたでしょ！それに大和が最近あなたの事調べテルの見たのよ、身体能力学歴とともに平均ジャスト！どう見てもわざととしか思えないって！」

しまったー！無意識に気配を遮断してたのか俺、しかも睨むくらいいいだろ！あんなのに絡まれるのは御免だと心も体も言つてはいる証拠ではあるが、これは拙いぞ！つか見られててのか、不覚、なんて様だこんちくしょう！しかもテストの点数くらいで人の事調べようとすんなや！

しかも大和？あの風間ファミリー軍師君か・・・・・・・・あ
の野郎、人識君ヨロシク殺して解して並べて揃えて晒してやろうか
？クソ！

「いや、いや確かにちょっととしたそれくらいこはやあるけど趣味兼護身術としてやつてるだけであつて……」

「嘘つか！あんなうまい気配の消しといで何が護身術よ！とにかく決闘しなさい！！」

「やだ、この決闘システムは一方的に相手に挑めるが相手がそれを

認めなきゃ成立しないはずだ

「むへー…なんで勝負してくれないのよー?」

「痛いのヤダし疲れるし金にもないん

大体俺は手加減しても殺しかねないんだから、死人出しかねない勝負なんざやつてられるかつてんだ!

「うう・・・・・ツーだつたら私に勝つたらどんなお願ひも叶えてあげるわー!それでどうー?」

別にして欲しい事なんかないしなあ。

「いい機会じゃない真心。ビツセ川神さん受けのままで諦めないと思つよ」

法規?何を言つてるんだ?大体諦めないと、どんだけタチ悪いんだよ。

「例えばこの勝負に勝つたら、ファミリーを含めて金輪際俺に関わるなとかさ」

「それを守る保証はないだる」

「嘘とかは吐かないと思つよ、寧ろ騙されたりするタイプの人間っぽいね」

確かに、けどそれでまた興味を持たれたら嫌だしなあ・・・うーん。

「仕方ないな。勝負してやる、だが俺が勝つたら今後一切俺に君の知り合い、主に女共を俺に近づけるな。だがお前が勝つたら俺も何か君の願いを聞いてやる」

「いいわよそんなの、勝つのは私なんだからーー。」

よしー言質は取つたーー。これでコイツに勝てば俺の学園生活もちつとは楽になるだろう。

まあこれがどれ程安易で油断した選択だったか、俺が思い知るのは遠くない未来なのだが・・・。っていう伏線じゅーまあマジでフラグ立ちそうで怖いから言わないけどさ。

恐怖と苦痛は同義ではない。

川神一子との決闘を受けてから十分後、運動場の中心に俺達は向かい合い立っていた。あの問答のあとは特に問題はなかつたがクラスメイトの目が非常に痛かった。

まあ当然だ。相手はあの川神百代の妹、しかも今まで一般市民と思っていた奴がだ。法規はニヤニヤ笑つてたから、コピソングしておいた。

「ヤベヒ・・・鬱になりそう、てかいつそ鬱になつた方がいい気がしてきた」

「?何いってんのアンタ

「いや何でもない」

「ア・・・周りからは風間ファミリーから俺が最も目に付けられたくない奴とかの視線をビンビン感じるしどう。今更ながらだが怨むぜ法規、いや俺の責任か。

早計だつ

まあ後悔しても遅いか、まあ川神一子が約束を違えることはないと思うが保険は掛けておくべきだな。

「では、武器の使用じやが

「私はモチロンこの薙刀よ」

そう言ってレプリカの薙刀を頭の上でブンブン振り回した。

「識真心君は如何するかの？」

ああ武器ね、如何しようかな
正面から先生どうどう戦う気なんかひとつかけらもなんだけどな、
既に仕込みも終わってるし。

それ有何より基本スペックからして俺と同等に戦り合える人間なん
てそういうこないしね。

「とりあえずは素手でいいです」

「とりあえずとな？」

「アンタ・・・舐めてんの？」

へ？ああ確か武人つて本気で戦わないと侮辱に値するんだつけ？だ
つたら何で殺し合いをしないんだ？いやされても困るけどさ、誇り
だなんだというのならそれを他人に押し付けるのはただの横暴で暴
力で武術うんぬんより、ただの性質の悪いチンピラと同じじゃない
か？

「別に、俺は武人じゃないし勝てれば他はどうでもいい。何より日
常に武器持ち歩く様な異常者と一緒にしないでほしいんだけど」

ビシッ！

殺氣！？

咄嗟に振り向いてみるとそこには怒氣と殺氣を同時に放つ川神百代

の姿が……怖いなオイ。大体起こるつてことは凶星だろ？見てる限り川神百代は素手が武器らしいけど。

「この勝負に勝てば関わる」ともないし問題なんかナッシング。まあ最悪、本当に太陽が今この瞬間爆発するほどの確立しかない敗退率だけ敗退したとしても進んであいつ等と関わるなんて愚かな相似はしないつつ。

「んじゃま、やつと始めるよ！」

「アアアアア……」

おお、殺氣が高まつ……た？怒氣だか殺氣だか本当のところ素人の俺には分からなかつたりするんだけど。大体俺の友達の殺氣からすれば鼻で笑えるほどだ。

「で、では双方準備はいいかの？…………始め……」

「川神流、川神一子！」

名乗りとかあるのか？それとも苛立つてるからぶちのめす宣言みたいなものか。

「橙なる種、人類最終 想影真心」

まあ建前だしいいかな？どうせ意味も分からぬだろうし。

「行くわよ！」

川神一子がそう言つて前に出ようとした瞬間、彼女は異変に気がつい

ただろ。」

「へ？あ、あれ？体が動かない・・・」

「何！？」

「貴様何をした！」

「別に、強いて言つなら催眠術。オカルトチック過ぎて信用できな
い櫃には洗脳と考えてくれていいかな」

「クッ、どうやつて！」

「どうやつて？そんな方法なんて腐るほどあるだろ、アンタは俺
の動きをみただろう、言葉も聞いた。まあこれは正直かなり簡易的
なものだからな、破れる奴は破れるぞ、発動条件はこの場合俺の言
葉、というより声。音による催眠だね。所詮の俺のはオリジナルに
は及ばないけど。俺と決闘という手段で相対した時点でアンタは罷
にかかるつたんだよ」

人類最終の体をもつとしてしてこの技術の最高峰ハイエンドに達している人間には届かないだろう。それぐらいこの術を教えてくれた人のスキルは
段違いに高かった。なんであんな人が普通にBarなんてやつてる
のか不思議でしょ？がないな。

「要するにやりたい放題というわけだ」

「くつ・・・・・・」

と。言いながらも俺はこれからどうするか迷っていた。別にこのま

またこ殴りにしてもいいんだけど流石に女の子にそんなことするのも正直気が引けるというか。大体それがしたくないからこんな志知めんどくさい方法とつてるんだ。本当だつたらあの薙刀を押し折つて腹を四割程度の力で殴ればそこで決着だ。

「あれだ、首チョップに決定」

漫画とかである首の後ろに手刀を決めて意識を奪うやつ、これ実はかなり危ない。実際にやると俺は経験済み、というか人類最終の学習能力をフルに利用して習得済みだからいいけどこれって延髄から走る脳への電気信号に直接影響を与える技術だから素人がやるとほぼ確実に失敗する上誤つて成功すると本当に死亡したりとか体に障害が残ることがあるらしい。漫画とかで軽くやつてるけど本当は原則スペックなじじやかなり練習が必要な高等技術だつたりする。

「ちょ、何する気！？」

「何つて今言つたじやん首チョップだつて首チョップ、大丈夫俺うまいから一瞬で気絶できるよ」

「したいわけないでしょ！？」

肢体したくない以前に俺の都合の方がこの場合優先だからね？

「さて、はいドーン」

と。首に手刀を決めて気絶させた。あまりにあつけない決着だけど一番楽な方法じゃね。流石に喧嘩（決闘）慣れしていない俺じや動いてるこの人の首に手套決めるのは怖いし。成功させる自信はあるよ？

「ワン子…？」

「どうしたんだ！」

「お前…ワン子に何をした…？」

「だから首チヨップだつて。あれ、実はマイナーな技だつたりする？ てか勝負ありですよ学園長」

「…………わかつた、この勝負想影真心君の勝ちじや」

「ですよね～」

これだけやつてまだ戦える人間はいないだろ。てか気絶しながら襲い掛かってくる人間なんてもはやホラーだわ。

もう帰れ。そう思つて後者の方へ向くと猛烈な勢いで俺に突貫してくる川神百代の姿が一瞬目に入った。

「怖いなあ、だから嫌だつたんだよ」

「ぐう…」

だがそれも一瞬で止まる、といつより無理やり一時停止をかけたかのようになってしまった。さつき言った事聞いてたのかな、俺は声でだつて発動は可能だつて。正確には脳内干渉けど。勿論精神干渉も可能だがこれはもう達の悪いどころの話じやないスキルなので使いたくない。単純に使い勝手が馬鹿に体にいいのもあるけどそれ以上に凶悪で最低すぎるスキルだからだ。幻覚の世界を見せその中で殺すことも可能、要するに能に勝手に自分が死んだと判断させて声明を停

止させるなんて事も可能だ。性質悪すぎだろ。

「俺がやつてるのは催眠術、正確には脳内干渉。切っ掛けがあれば誰にだつてかけれるんですよ。川神先輩、例え貴女でもね、人が人である限り俺のコレから逃れることは叶わない。例外は、ない」

とは言わない。人類最強、最悪レベルの意志の強さとか俺と同じかそれ以上に催眠系スキルを網羅してるんだつたら別だけど。人間の脳や身体の構造上これから逃れる術はない、機械の体にでもしない限りな。

「別に殺しちゃいませんし、身体的にも精神的に後遺症なんて残りませんよ。安心して下さい、それに僕は武人でもなんでもない例えるなら非戦闘員だ」

人類最終の肉体をもつて言つ言葉じやないが、まあ心の持ち様の問題だよね。

「だから俺に戦いを挑んだことそのものが間違いなんですよ。僕は貴方達とは違う、特殊な技法を持つてはいるがあくまで一般人、別にスポーツ感覚ぐらいならいいですけどこういうのはマジ簡便なんです」

「では何故決闘を受けた?」

依然俺を射殺さんばかりに睨む川神百代、まあこの程度の殺氣じや俺は揺るがないけど。

「約束したからですよ、俺が勝つたら金輪際先輩を含めた貴女達が俺に関わらないようにしてくれと」

「な！」

「別に不思議じゃないでしょ？何度も言いますけど戦いとかホント嫌いなんですよ、こんな風に人の恨みとか怒りとか買うのも嫌いだ。今回は俺のこと怖がつて俺に関わらなくするためだつたんですけど、逆効果みたいでしたね、ほんとすいませんでした」

そう言つて頭を下げる、上げるときょとびくじしたよつな顔をした川神百代がいた。

「それじゃ俺は失礼します。多分一子さんは三十分ほどで田が覚めると思いますし貴女のも同様ですから。それじゃ」

そう言つて俺はその場を去つた。これでもう俺に関わらないことを祈るばかりだ。

これなんてギャルゲ？

「あ、～いつた～」

決闘が終わり、保健室に行こうと思つたが血が出なくなつたので止めて普通に教室に戻つた、がまだ痛みが引かないため机に突つ伏し唸つている。

「あんなことするからだよ」

まあ自業自得以外のなんでもないんだが痛いものは痛いんだから仕方ないだろ？

「でも決闘には勝つたんだから結果オーライってことだね」

「だけど明らかに川神先輩の怒りを買つちまつたしなあ～」

勝負を挑まることはないとは思つけど、恐いなあ・・・。

「それより今日放課後家来ない？ 優菜も今田早いし」

「優菜ちゃんなら朝会つたぞ、つか何で優菜ちゃんが出てくるんだよ？」

「いや～、優菜が勉強教えて欲しいって言つててね、僕あんまり人に教えるの得意じゃないから真心なら適任かなつて思つたんだよね」

「勉強？まあ別にいいけど」

「いやホント助かるよ、最近優菜があんま僕の言う事聞いてくれなくて困つてたんだよ」

「優菜ちちちゃんが？そりこいつ風には見えないなあ、まあいいけどや」

「それより今回の件で余計に君友達できにくくなつたね。元々君つてあんまり友達とか作る気なさうだつてけど」

「やつこやこの一件で俺の事を学長ビックリとかほとんど全校生徒が知ることになつたわけか。

「やつぱりメンディングサイことになつやつだなあ・・・・・・」

「まあその点については諦めなよ」

「そうだな諦めるしかなさやつだし。」

時間が飛んで今は放課後、僕は法規と一緒に法規の家に向かっていた。法規の両親は互いに警察関連の仕事に就いている。法規も将来はそなりたいと言っていた。

「やついや優奈ちゃんは、部屋はどうなってるんだ、俺達の方が早く着いちまつんじゃないか？」

「優奈は陸上部だけだ、今は自主練が主らじこから今日はもう家にいると思つよ」

「ふうん つておいもう着いたぞ」

話をしている間に法規の家に着いたみたいだ、そういうや家に来るのは久しぶりだな。

「それじゃ入るつか

そういうながらドアを法規は中に入つて行つた つておい
優奈ちゃんなんで鍵閉めてねえんだよ、いくらなんでも不用心すぎだろ。

「おじやまします」

「とつあえず優奈を呼んで来てくれないか、俺はお茶とかの準備してくるよ」

「は？ そんな気遣いしなくていいだ」

「友達とはいえ家に来た客人に茶を出さないわけにはいかないからな、ほらさつさと優奈を呼んで来てくれよ」

「あ、ああ」

つたく何をそんな一ヤ一ヤしながら急かしてゐるんだ?

h

?たゞたゞなんて客に妹を呼びにしかせてるんだ?

場所変わつてないといいけど、まあそつ簡単に部屋の位置なんか変えないか。

「優奈ちゃん、遊びに

優奈ちゃんのあらう部屋のドアの開け中を覗き込むと、そこには下着姿の優奈ちゃんがいた。

「…………失礼しました」

スゥーっと出来るだけ静かにドアを閉めて、それから一言。

「これどこのギヤルゲー？」

とりあえず法規をシバこう。

そう思い立つた俺は階段を降り、リビングに向かつた。

「法規」

「あれ? どうしたの真心そんな顔して、ドア開けたら優奈の着替えシーンでしたとか? あはは流石にそんなどじのギャルゲ みたいなこと現実にあるわけないよね」

「…………」

「…………」

「え? あれマジ?」

「法規一生の頼みだ、一発でいいから本気で殴らせり」

思いつきり、それこそ自分の握力で手が砕けそうなほど握り締めた拳を振りかぶりそう法規に言つた。

「いやいやいや…ちょっと待つて…ワザとじゃなししかも流石に予想外だつて…! ちょっと頼むから怒りを抑えて! そんなのくらつたら僕文字通り爆散するからね…! ?」

「安心しin、痛みすら感じず逝ける筈だ。だから
散れエエ…!」

The 爆散。

なんてことにはならず寸止めにした。ただその拳圧で法規はブツ飛び空いていた窓から庭まで飛んでき、そのまま草むらに突つこんだ。

手加減したんだけどな・・・、まだまだ俺も。

「びっくりした～、それになんか背中が痛い」

それから五分後、法規が何事もなかつたかのように戻つて來た。

「俺は心が痛いよ、良心がズキズキとナイフに刺されたが如く

あと申し訳なれど自殺したくなつた。

「こや別に気にしないでことと黙つよ」

「小学生とかだつたらそれだけで済むかも知れないけど、優奈ちゃんもう中学三年生だぞ！」

下手したら俺捕まるんじゃね？

「こやこや優菜としても本望だと黙つよ？」

「お前は妹を痴女かなんかと思つてんのか！？」

「はあ・・・・真心、君はバカだな」

「今だけはお前に言われたくない」

「これから優奈ちゃんと同じ顔して会やいいんだ？」

「どうすんだよ、もつ俺帰つていいか？」

優奈ちゃんに会わせる顔がないよ、超帰りたい・・・。

「とつあえず顔洗つて出直してへる」

「顔なじみでも洗えるけじへ。」

精神的な意味だつてのーー！

そんなやり取りをしてると、一階からドアが開く音が聞こえタンタン、と階段を下つてくる足音が聞こえてきた。そしてそれからリビングのドアが開きそこから優奈ちゃんがちょいと顔を出してきた。

「えつと、じんじんせー」

「あ、ああ、じんじんせー。えつとそれっきの」となんだけど

俺がそう切り出すと、優奈ちゃんは顔を真つ赤にして顔を引っ込めてしまつた。どうじよつ、完全に怯えさせちゃつてるよ。つかおい法規、何退散退散とか言つながら窓から逃げてやがる？あとで覚えてろよ。

「えつと　「めんね優奈ちゃん、さつきはノックもしないでドア開けたりしちゃつて」

「い、いえもう氣にしてませんから・・・その、真心さん今日は何で家に？」

法規の奴、優奈ちゃんに連絡していなかつたのか？

「法規の奴に優奈ちゃんの勉強の手伝いをしてやってくれないかって言われてね」

「兄さんが？えっとありますか？」

「いや別に気にしなくていいもいよ、それより今日は帰った方がいいかな？優奈ちゃんとしても気まずいだらつこ」

寧ろ帰りたい。

「い、いえ別にそんなこと気にしないでください！私は気にしませんから……」

「そ、そう？ならいいけど……じゃあとつあえず部屋に行こつか、法規の奴はどこか行っちゃったしね」

「はーー！」

それから俺は優奈ちゃんの部屋で勉強を見てあげている。もう三年生だから勉強する範囲も大変だそうだ。第一志望校は何と川神高校らしい、確かに家も近いけど俺としては遠慮して欲しいんだけどそのことを伝えると、

涙目で「イヤですか？」

と聞いてきたので反射的に前言を撤回してしまった。

俺って意思弱いな。それより優奈ちゃんって彼氏とかいるんだろうか？ いるとしたら俺と二人きりつてのもまずいんじゃないかな、法規もこの家にはいないみたいだし。

「優奈ちゃんて恋人いるの？」

「へえ！？い、こませんけど……どうしてそんなこと聞いてきたんですか？」

何故か期待に満ちたような顔で聞いてくる優奈ちゃん、どうしたんだ？

「いや、いたとしたら俺と一人つきりってのもなんかマズイ気がしてね。まあいらないんだつたらいいのか？いやもう中学三年生だし世間体的にはマズイ部類の状況なのか？」

「べ、別に私は気にしてませんしそれに真心さんは安心できるからそんな変な心配はしてません、真心さんこそ彼女とかいるんですか？」

「いや、俺はあんまり高校で人間関係は広くないし女子の知り合いなんかいないからね」

まあ今田に敵対相手ならできたっぽいけど。

「そ、そなんですか！良かった！…」

いや、俺の人間関係が広くないのがそんなに嬉しいか？泣くぞ。

「えっとですね、真心さん明日暇ですか？」

明日？まあどうせ部活動は未所属だし問題はないか。

「暇だね、特に用事はないけど いつことかな」

明日も勉強の手伝つて欲し

「いえ、その真心さんがいいのならなんですけど つとね買い物に付き合つてくれませんか？」

明日ちよ

顔を真つ赤にしながらうつてきた優奈ちゃん。つか買い物が、なんか欲しいものでもあんのかな？

あれ、これつて見方を変えれば「テーテじやね？」

「別にいいけど、優奈ちゃんと一緒にで？法規とか友達とかは誘わないの？」

「え？ それは 兄さんと友達も用事があるようで真心さんしか」「

そういうとか、なら仕方ないよな。

「分った、じゃあ明日はもつもつと早く帰つてこれるよう努力す るよ」

「ハイ！…」

まあそれからは普通に勉強の手伝いをし、帰ろうとしたときちょうど法規が帰つて来たので軽く（ふきとぶていど）「ドアポンをして帰

つ
た。

転校生は時代錯誤？

朝、俺はいつも通りの時間に起きて何事もなくいつも通りのことをして家を出た。それから通行はなるべく といつより確実に風間ファミリーに見つからぬように配遮断をつかつて登校した。

途中俺に気付かなかつた人力車メンドに轢かれかけたがそれ以外は問題はなかつた。

登校して暫く椅子に座り本を読んでいると、ヒヒーンといつ鳴き声と共に金髪の女性が登校してきた。

「いや何故乗馬？」

「さあ趣味なんじゃない？」

趣味といつ理由で学校に馬で登校されるのも困ると思つたが・・・。

「それより法規、お前今日予定あるのか？」

「いや、なんで？」

「ん？ 聞いてないのか？」

「今日優菜ちゃんと出掛け「あーーーん」と用事があつ

「たんだー」無茶苦茶ウソ臭いぞ

「まあいいじゃないか、優菜のこと宜しく頼むよ」

「まあ頼まれてはやるけど、それよりあの金髪少女はなんなんだ？あれだけ目立つ姿勢してたら噂になつてもおかしくないと思うけど」
大体在校生なら俺が知らないってのもおかしい、名前までは把握してないがあれだけの見た目なら俺は一応顔くらいなら把握しているはずだ。

「転校生じゃない？乗馬で登校する人なんて聞いてことないし何より僕自身知らないし」

「ふうん。まあ厄介事を持ち込んでくれなければ別にどうでもいいけど」

「そだね～真心の場合はそうだろうね」

「それより先生遅くないか？もつ朝の七時始まつてもいい時間だぞ？」

もう八時二十分過ぎ始めてる、いつもならあの先生は通常の二分位前に初めて早めて終わるんだけどな。

今より第一グラウンドで、決闘が行われます。内容は武器ありの戦闘です、対戦者は川神一子さんとクリスティアーネ・フリードリヒさんです。観戦する人は

「これが理由なんじゃない？」

「てかクリスティアーネって誰だ？」

完全に外人の名前じゃねえか。

「多分さつきの乗馬の人じゃない？」

「ああ確かにそうかもな、で？どうするんだ、決闘が始まっちまつたとなると始まるのが遅くなるぞ？大体朝っぱらから始めるなよ」

他の奴等の迷惑を全く考えてないな。まあそれは昨日の俺もそうか。

「見に行こうよ、大体君はもう風間ファミリーには手出しえれない身なんだからさ、スポーツの観戦程度に思えばいいよ

「血が飛び散りかねないスポーツの観戦つてのも嫌なもんだけど、まあいいか。暇なものは暇なんだし」

そう言い俺と法規は立ち上がりグランドに向かつた。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行つ！一人とも前へ出で名乗りを上げよ！」

厳かな声でそう宣言したのは、川神鉄心学長

「お、ギリギリセーフみたいだね。間に合つた間に合つた

「どうでもいいけど早く終われ」

なるべく風間ファミリーから離れたところまで移動した俺達は一人に目を向けた。

「どうやら川神さんは真心と戦つた時と同じ薙刀を使つみたいだね
「アリヤリアの武器つてのは変えるもんじゃないだろ。俺とかお前
じやあるまこし」

「確かにそうかもね。あ、転校生さんはレイピアか」

「もちろんどうちもレプリカだが、レイピア
もちろんね、長巻と戦
いための方法は心得てるのか？」

「ねえどうりが勝つと思つ？」

「さあな、武器の有利でいえばもちろんだけど薙刀だな。あれは使
い方を誤んなきや相当な脅威になる武器だ」

「薙ぐことはもちろん突き等あらゆる攻撃方法を有してる。気を保有
していない非力な女性でも遠心力を利用した強力な攻撃が出来るの
が薙刀だ。川神一子が杖術や棍術にまで精通してるとは思えないが
ちょっとでも噛んでいればそれだって十分な脅威だ。」

「実力は？」

「さあな、言っちゃ悪いけど川神一子は努力で力をつけるタイプだ、
才能にはあんまり縁がないな。それに比べてあのフリードロビ・・・
だつたか?はかなりの才能があるように見える」

ま、所詮客観的に しかも俺みたいな武に関してはそこまで精

通してない奴の言葉だからな、そこまで頼りになる言葉じゃないか。だけど川神一子のことは実際に刃は交えなくても対峙したんだ、ちつたあ分かつてるつもりだ。

「俺はフリードリヒが勝つ方にかけるな、大体俺と戦つた時のダメージ回復してるとか？まあメンタル面だけのアタックだけだつたけどさ」

「まああの子、単純そうだしね。一日経つてるから忘れてるんじゃない？」

延髓に一撃食らわしてるとか？ 次の何喰わぬ顔で決闘なんてされるとちょっと心配してたこっちからするとかなり釈然としない。

「…………まあいいか、始まるみたいだな」

二人は武器を構え

一気に前に飛び出した。

最初に仕掛けたのは川上一子、薙刀のリーチと遠心力を生かした様な薙ぎや突きで敵を寄せ付けず倒すセオリー通りの戦い方だがこれがどうして中々に強力だ、現にフリードリヒには攻め切れずにいた。

「ひゅう、凄いね川神さん。まともに戦わせてくれなかつた真心君との決闘じや全く分からなかつたけどこれじゃフリードリヒさん攻め切れずに負けるんじやない？」

確かに、川神一子の攻めにフリードリヒは防御一辺倒の姿勢だ。だが

「攻撃が単調すぎ

「え？ そつ？ そういう風には見えないけど……」

「攻撃パターンが単調すぎるんだよ、自分の技を信頼するのはいいけどあれだけ繰り返されればいやでも付け入る隙は見つけられる」

「へえ……あ、確かに攻撃の順が一定だね」

と、話している間にフリーードリヒは川神一子が袈裟掛けに振り下ろした薙刀を下がって避け、それから足を前に出し薙刀を踏んだ。

その為体勢を崩した川神一子の鳩尾にレイピアによる強烈な一撃が見舞われた。

「あれは決まつたな、気絶までしないのは流石だけど暫くは動けないだろ？」

俺だったらどうだろ？自分で自分を傷つけるのはまだしも他人からの攻撃をまともに受けたことはないからなあ、やっぱ気絶しちまうのかな？まあ関係ないか。

「さて戻ろうか真心」まで想影真心「わあーお

決闘も終わりをつと教室に戻ろうと思つた矢先、俺達の前に川神百代が現れた。

「なんですか川神せ「私と決闘をしろーー！」

この野郎 じゃなかつたアマ昨日の俺の話全然聞いてなかつたのか？

「断固辞退させてもらいます、決闘は両者の同意が無いと行えない筈ですよね？それでは失礼します」

そつと横を通り抜けようとすると今度は金髪少女ヒロィーネから声がかかった。

「貴様！決闘を申し込まれながらそれを無下にすることはそれでも武士か！？」

いや武士じゃねえよ。あ、この人乗馬で登校したのってまさかの時代錯誤か？いや流石にないか。

「俺は武士じゃありませんし武人でもありません、ちょっと……とだけ腕の立つただの一般市民です。てか川神一子、俺はお前に勝つたら君の知り合いで主に女を俺に近づけさせるなって言つたよな」

約束ぐらいい守れよ、守つてくれないと俺昨日やつたこと骨折り損の草臥れ儲けじやん。

「あ、忘れてた。でも私じゃお姉さまは止められなによ？あとワン子でいいよ！」

まだ満足に動けないのかちょっと足がふら付いてるがそんなことあどうでもいい！つか昨日俺のやつた仕打ちに対してニックネームで呼ぶことを許すとは ちょっと感心。

つていやそんなことはいい。

「それじゃ昨日の決闘つて意味無いじゃん、つか止める努力ぐらい

しほみ

「えへへ

「えへじやねえよ、あと法規お前も説得手伝え

「え、ヤダ。目付けられるの怖いもん

もん、じやねえ!!

「兎に角決闘は受けません、それでは

そう言つて俺は今度こそ川神百代の横を通り過ぎた。

「行くぞ法規」

「つよーかい

そして校舎に入る瞬間、

「逃げるのか?..」

と。そう問われた。

「ええ、だって痛いのは嫌ですから。あと忘れてるんじゃないですか?何度も言いますけど僕の脳内干渉

昨日川神一子にやつたのは貴女にだって有効なんですよ、やつと思えばワンテンポで洗脳可能ですから、要するに俺と戦いたいならまずそれを看破するだけの実力をつけてくれないとですね」

まあ実力がいくらついても知識と催眠に刃向かうだけのメンタル力がないと何の意味もないけど。それに俺の本当の武器は言わなくとも分かると思うが人類最終の力を最大限利用したインファイトだ。

こと戦わず勝つ方法なら誰にも負ける気はしないし、何よりそれ全てを看破されても肉体面でも負ける気はない。

さつさと教室戻ろう。

「…………否これはお出かけである

とうあえず決闘騒ぎが終わって俺達は教室に戻ってきたわけだが

。

「また厄介なのが転校してくるわワン子ちゃんは馬鹿だわ…………やつてらんねえ」

もう無理しても転校したくなってきた。でも金が…………あと友達…………。

「大丈夫だつて、先輩もあの人達も馬鹿正直な猪武者みたいだし闘ちみたいなことは絶対してこないから絡まれたら適当にあしらえばいいでしょ」

氣楽そうに、といつより他人事のようにそう笑いながら話す法規をぶん殴りたくなるのを抑えながら睨みつけた。

「じゃあおまえが俺の代わりをやるか？想操術で俺とお前を入れ替えてやろうつか？」

想操術は簡単に言つてしまえば代表的な催眠術から世界そのものを入れ替えるようなチートみたいな真似すら可能な応用の広い脳内干渉術だ。

他者の脳内に干渉し幻覚を見せるのは勿論、擬態や存在そのものを意識の外に外すなど色々なことが可能だ、やろうと思えば幻覚の中で対象を殺しそれを脳内に叩き込めばそれだけで脳は自身が死んだと判断し生命を停止させる、骨を折る幻覚を見せれば実際は折れて

いなくても痛覚が残つたり筋肉が断裂してしまつたりとか。

実際にエゲつなくこれ以上ないほどの非戦闘スキルだ、何より幻覚だと理解しようとしてもできないというのが何より怖い。

「いや遠慮しとくよ、僕だって他の子ならいけど川神先輩と対峙する覚悟はないな。大体僕は君ほど強くないって」

「俺だって強くはないって」

強いのは俺じゃなくて俺の体、メンタル面じゃ俺はオリジナルには遠く及ばないし俺自身とともにやり合つたことなんて数回、なにより全力なんて対人で出したことすらない。

「兎に角、成る丈闊わらなによつにするしかないわけだ」

「そうだね、まあ僕もなるべく協力するよ」

まあ法規がバックにいるなら安心か・・・?いやなんか怖いな。

「どうでもいいけど授業いつやるんだ?」

「確かに五分で始まるね、まあ一時限目は現文だし用意してさつさと席に着こいつ」

「そだな、授業に集中すりやいやなことも忘れるだろ」

授業が終わり放課後、休み時間の度に風間ファミリーの奴等が来ないかと戦々恐々としていたが幸い一度も俺の目の前には姿を現さなかつた。

「さてと、法規お前やつぱ今日一緒に来れないのか？」

「優菜の話？いやーごめんね、ちょっと込み入った用事でね」

スゲエ嘘臭い。大体こいつは成る丈面倒事には関わりだがらない、まあ関わったとしても絶対に当事者にはならない、だから込み入った用事なんてあつたところでこいつは絶対にすっぽかすか違うところから手を回すに決まってるのだ。

要するに何かを企んでいる、まあ別に俺に不利益になることはしないだろ、そのくらいの信頼と信用はしてる。

「まあ何かは聞かないけど・・・とりあえず俺は先に帰るわ」

「うん、じゃあね～」

それから俺は法規と別れ走つて法規の家に向かった。

「お邪魔します」

歩いて大体三十分後、法規の家に着いた俺は、家の中に入った。

「優菜ちゃん、準備は出来てるかーー」

玄関で声を出して確認を取る、また前みたいな失敗は「めんどいな。

「はーい。ひょっと待っててくださいーー」

この声が聞こえてから十分後、優菜ちゃんは私服に小さいバックを肩にかけて現れた。

ぶっちゃけ友人の妹でも可愛いもんは可愛い、要するに優菜ちゃんは可愛い。

「それじゃあ行こうか

「ハイ。あ、制服なんですね」

「ああ待たせちゃいけないと思つてね、駄目だつたかな？」

「いえ、気にしてません」

なんでこんないい子が法規と兄妹なんだ、ほんと不思議だ・・・。

それから俺と優奈ちゃんは天吹家を出て歩きだした。

「せつこえは何を買つ予定なのかな？」

「えつと服と文房具です」

服と文房具か、それなら別に遠くに行く必要はないか。

「じゃあ近くにあるしそんな時間かからないな。そうだ、時間が余つたらちよつとお茶でもして帰ろうか、近くにいい店があるんだ。俺の奢りだけ行く?」

「え、いいんですか?」

「別に遠慮する必要はないよ」

「じゃあ・・・楽しみにしてますね!」

そして大体十分後、服屋についた。

「それじゃ俺はここで待つついて来てくれないんですか?」滅相も

なごどりでもつこてこせまわ

ホント思つんだが女人の人の涙田とか上田遣いとかつて卑怯だと思ひ、それも俺とかの耐性のない奴らにしたら尚更。

「これなんかどうですか?」

「うん、似合つてるよ。あ、でもせつとき回りやつで薄桃色のやつがあつたけどあれの方がいいんじやないかな?」

「やつですか!…じゃあそれにしますー」

「え、優奈ちゃん。それ俺のセンスだからあんまり鶴呑みにするのも「大丈夫です!…」・・・ハイ

まあいいんだけどね。でもこんな会話もう何回もやつてるんだ、アドバイスもしないとなんか悲しそうな顔するし、もう手の打ちようがありません。

因みにわつときは下着まで選ばせられそうになつて土下座する勢いで拒絶した。流石に不味いでしょう、つか両親に殺される。

まあ法規なら笑い転げそつだけだ。

「優奈ちゃん、わざそろ量も増えてきたし今日はこれくらいこなしてよ

「へ?あ、すいません

うか

「別に謝んなくてもいいよ。で、会計済ませて文房具買いに行こうか、時間は有限だ」

それから会計を済ませた俺達は、服屋から文房具屋に移動し買い物を済ませた。

まあ文房具屋では特に何事もなく買い物を済ませた、ただ一つ優奈ちゃんが業務用の消しゴムのセットを買おうとしたときは驚いた。

買い物が終わり、俺のお勧めの店に行くことにした、場所はそこまで遠くないからすぐに着く距離だ。

「それじゃ店に行こうか」

「ハイ。でもそのお店つてどこにあるんですか？」

「すぐそこだよ、ただ場所が場所だからあんまり人が来ないんだよね。いいところなんだけど、経営してる人も長年の夢が叶ったとか言ってたけど趣味みたいなものみたいだし」

「そりなんですか、でも場所が場所つてそんな変な場所にあるんですか？」

「うーん・・・まあね。あ、ここだよ」

「へ？でもこいつて……」

俺の立ち止まつた場所は某大型スーパー駐車場だった。

「だいじょうぶだいじょうぶ」

そう言つて俺はその駐車場のエレベータに入り地下一階のボタンを押した。

「え、入つて」

「は、ハイ・・・」

そして地下一階、エレベーターの扉が開くと、目の前に木製のドアがあり、その上に真っ白な看板があつた。少なくとも地下にある店としては田立ち過ぎる上にこの店しかない。理由は簡単、この店の店長が金にモノを言わせたからだ。

その看板に書いてある店名は

「Crash Classic」。

『Piano Bar

『—Piano Bar Crash Classic（ピアノバークラッシュクラシック）』。

そう書かれた看板の前に俺と優奈ちゃんは立っていた。

「ijiが、真心さんのお勧めの店ですか？」

「そ。まあとりあえずは入つてみてからのお楽しみってことで」

「え、でもこじつて未成年はまずいんじゃないんですか？Barって書いてありますし」

「大丈夫大丈夫」

そつ言つて俺は店の扉を開け中に入った。

「わあ・・・・」

優奈ちゃんが感嘆の声を上げたその視線の先には、純白の燕尾服に胸ポケットにはハンカチーフをセットし、軽くウェーブのかかった髪を床に着くような長さまで伸ばし肩元近くで一括りにした美男子が、ピアノの前の椅子に座り目を閉じていたからだ。

「相変わらず絵になるよな、曲識さん」

この人、零崎曲識という名前だ。間違つても殺人鬼の一賊ではないが戦闘スキルそのものは少女趣味ボルトキープにも劣らない実力を誇つていたり

する。てこづか少女趣味だつたら絶対優奈ちゃん連れてこれないし。

「悪くない、まさか君がこの店に異性を連れてくる日が来るとね予想もしていなかつた」

ゆつくりと口を開け、俺達の方に口を向けてやつぱり曲識さん。

「その言い方だと彼女みたいに聞こえますよ」

「違つのか?」

「法規の妹です、天吹優奈ちゃんです」

「は、初めまして、天吹優奈です」

「零崎曲識、この店の店長をしてこる。しかし悪くない」

「せうへいじです、まあ変な勘べつけはやめてくださいよ

「さうか、悪くない。だがそちらの方はその立ち位置では不満のようだな」

立ち位置?意味がわからん、とりあえず座らう。優奈ちゃんの席を引くのを忘れない。

「それじゃ座らつか、優奈ちゃんカウンターでいいかな

「は、ハイ」

「つてあれ?予終さんは・・・」

「えー、」

カウンターに座り、あたりを見渡すと白い髪をオールバックにして縁のない眼鏡をかけた男性がカウンターの向こうから出てきた。

「久しぶりです、予終さん」

この人、あわいよつこ淡予終といつこの店のバー・テンドー的なことをしている人だ。

「そこ」の娘のことは聞いたよ、法規君の妹ちゃんなんだって？僕は淡予終、この店のバー・テンドーをしてるんだ。よろしくね？」

「は、ハイ！」

「フフ、またのみたいものたのみなよ」

「え、でもここって……」

「大丈夫、予終さんはお酒だけじゃなくて、料理もめちゃくちゃうまいから」

そう言つて立てかけてあつたメニュー表の一枚を手にとつて優奈ちゃんに渡した。

優奈ちゃんはそれを受け取り、開いて中に書いてあつたメニューを見ると、目を見開いた。

「えー？ ホントにここってバーなんですか？」

「普通はそういう反応するよね」

そのメニュー表に書かれていたのは、そこら辺にあるファミレスのメニューの様なオムライスやドリア、流石にハンバーグ等はないが麺類なども揃っていた。

「凄い」

「兎に角何か飲みものでもたのもうか、歩き疲れたでしょ」

「ハイ、えつとじじゃあアイスティーを一つと・・・真心さんは?」

「俺もアイスティーでいいです」

「畏まりー」

客に対する敬意がないのも相変わらずですね。

と。俺達が注文を終えた瞬間、曲識さんはまるで鍵盤を破壊するかのような勢いで指を叩きつけた。

乱暴に叩きつけただけの様に見えたが、ピアノからは調和の取れた音が流れ、そのまま曲識さんの流れるような指の動きとともにピアノから滑らかな音が流れだした。

「綺麗・・・・」

曲識さん大会とか興味ないからでないけど出たら確實に世界狙えるからな、ピアノは勿論声も他の楽器についてもスペシャリストだ。

なんで大会に出ないかといふと、実はこの曲識せん、ピアノとかその他の諸々の楽器でのオリジナルのCD等を匿名で出しており全国に凄まじい数のファンがいる。この店もそのCDで稼いだ金で建てられている。

「ハイお待たせ」

そう言い置かれたアイスティーを一口飲む、相変わらず美味しい。

「美味しいー」これ市販のものじゃないんですか？」

「僕が色々とブレンンドしてるんだー、味見は殆ど真心に任せてるから真心の好みの味になってるけどね」

「せつこつ」と、まあ好みが合つてて良かつたよ」

「えへへ、真心さんと好みが同じ・・・・」

ん?どうしたんだ優奈ちゃん。顔の表情がなんか崩れてるぞ、フニヤフニヤになつてるとこつか・・・。

「んじゃ追加でチーズケーキを

優奈ちゃんも

いる?」

「・・・・・・へ?はい欲しいです!」

「それじゃチーズケーキを一つお願ひします

「ソースはどつする?無しにするかい?」

「優奈ちゃんはどれがいいかな、ストロベリーとブルーベリーとか
もあるんだぞ」

「私はストロベリーで」

「俺もそれでいいかな」

「分かったよ」

あれから三十分程、曲識さんの曲を聴きながら食事をした。曲識さんは基本的に自分のオリジナルの曲しか弾かないけどその全てが聞き入ってしまうほど美しかった。

「ホントに良かったんですか？ やっぱり私も半分払った方が……」

「

「気にしなくていいよ」

曲識さんの店でちょっとした食事を済ませた後は会計（もちろん全額俺が払った）を済ませて店を出で、今は優奈ちゃんを家に送るとこうだ。

「此処でいいです、もう家まですぐですしね」

「やうか？ なういいけど、んじやまたね優奈ちゃん」

「ハイ！ あ、また一緒にお買い物の……行ってくれますか？」

「ああ、こつでも」

「ツーあつがヒツ」やこまくー。」

優奈ちひやんとはそこで別れた。

「ふう・・・・帰るか」

明日は朝からバイトだし少し早田に寝よう。

俺のバイト先、その名は・・・

土曜の朝、8：45。

今日は、というより土日は基本的に毎日バイトだ。行っている場所はファミリーレストラン。元々俺は前世を含めてバイトをした事がなかつたし就職した会社も接客業とかとは縁がなかつたし人前に立つのだつてプレゼンの時くらいだったからここでバイトは色々と刺激的だ。因みにバイト仲間も中々刺激的な人が多い。

「おはよひざこます」

バイト先に来てまづあつたのはフロアチーフの轟さんだった。

「あら、想影君おはよ」

轟八千代さん。金髪ロングの細めの女性で確か二十歳だつた気がする。機械音痴で世間知らずで天然、おまけに帶刀というファミレスのフロアチーフとして地味に問題がある様な気がするが問題なくこなしている。店長にメロメロ。

と。曲がり角から白藤杏子さんが出てきた。朝からなのに関わらず片手にパフェを持っている目付きが悪い雇われ店長だ。因みに元ヤンだつたりして昔轟さんをイジメていたイジメっ子を以下略してその時から轟さんにベタ惚れされ世話をしてもらつて、店長という役職についているがその実質は二ートと変わらないという人だ。店長の仕事をしてないしね。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

といふか!ここまでくれば

大概分かるだろ？」「こ、あの『ワーカー』といつ漫画の舞台のファミレスだ。登場人物と同じ性格と名前の人もいる。確かワグナリアって北海道にあつた気がするんだけど。もう突っ込むのも疲れたしなんか慣れた。

そう考へていると店の入り口の自動ドアが開いてお客様が入ってきた。

「いらっしゃいませ！何名様ですか？」

「三人です」

「はい、禁煙席と喫煙席どちらにいたしますか？」

「あー……じゃあ喫煙席で」

「戻りました、こちらです」

「ふう……」

もう一ヶ月になるけどやっぱり接客って緊張するな。向いてないってわけじゃないと思うし別に苦手ってわけじゃないんだけどどうも毎回毎回緊張しちゃうんだよな。

「それって普通じゃないですか？」

「そう思う？いやでもね～、一ヶ月もやつてゐんだからもう少し普通の対応くらいできないようにならなきやさ～」

俺の悩み？の相談に乗ってくれたのはWorking本編主人公こと小鳥遊宗太君、俺より一つ年下なんだが姉三人妹一人いながらその人達全員の掃除洗濯料理等々の家事をこなしつつ尚且つバイトをしながら成績を下げるといふ俺からすれば既に神業的はことをしている、この現世前世含め数少ない本当に信用できる人物の一人だ。原作を知っている俺からすればこんな人物が本当に存在してて知り合いなんてのは既に偉人に会つてゐる気分だつたりする

「でも俺も偉そうな年上の接客の時は陰鬱だつたり雑な対応しちゃいますよ。はあ～今日先輩いないからちつちつちいものが～」

この病的なほどちつちつちい物好きがなければ。

「オイお前らハンバーグ定食とフライドポテト出来たぞ」

キッチン担当の佐藤さん。その佐藤さんの後ろで大きめの鍋を持っているのは佐藤さんと同じくキッチン担当の相馬さんだ。佐藤さんは目付きが悪く少し無愛想だがそれ以外は普通で気配りのきくお兄さん的な人で、相馬さんは何故かバイト以外での俺達の行動や家族構成を把握している影の最強？だ。

「佐藤君、ちょっと僕カレーの仕込みやらなくちゃならないから、もう少しで上がる天ぷらの方お願ひね。想影君と小鳥遊君ももうすぐ混んでくる時間だからね」

「あー了解。お前らもさつさとホール出ろよ

「分かりました」「はい」

そう言ってホールに出ようとした時、丁度曲がり角から一人の女性が戻ってきた。

「伊波さん！？」

「さああああ！？た小鳥遊君と想影さん」

ホーリーから戻ってきたのはオレンジ色の髪をした女性の伊波さん。男性恐怖症で男または雄が半径約一三メートルに入ると問答無用で殴ってしまう癖がある人。しかも地味に腕力が強い。小鳥遊君が世話係として任命されており日に何回か殴られていた。何故か俺はさん付で露骨に怯えられている。男性恐怖症でもここまで怯えられているのは俺だけだ。

「伊波さん、なんで想影さんだけそんな怯えてるんですか。いつもあの距離なり確實に殴つてくるのに」

それも困るけど。俺は元より小鳥遊君もかなり丈夫だから大きな怪我は滅多にしないからいいけど普通の人ならあの威力だつたら骨折とかするんじゃないかな?ごく稀に相馬さんとか顔面に喰らつてるけど。

「本能て・・・・それ俺が雄の犬とか子供とか殴つたりしないんで

すかつて聞いた時もそう言つてましたよね！？伊波さんは獸か何かなんですか？」

「ち、違うもん！人間だもん！」

「だつたら一々人を殴るならまだしも怯えないでください。失礼ですよ！」

いやいや小鳥遊君殴るのもどうかと想つた？君もだんだんここに染められてきたな。俺もだけど。

「うひひ・・・・・氣を付けの」

「まあいいです。とりあえず離れてください。俺達十四卓さんにハンバーグ定食とフライドポテト出でなくけやいけないんで」

「もうなんだ。分かつた」

そつと音つて遠く伊波さんの横を通りてホールに出る小鳥遊君とそれを恋する乙女見たいな目で見る伊波さん。実際そつなただけどね。

「伊波さん」

「は、はい・・・何？」

「ああいや、別に俺は気にしてないから伊波さんも気にしなくていいからね。男性恐怖症が無くなつたら多分それも治るだろつ」

「うんありがと」

「それじゃ

「あ、想影君…ちょっとこいかな」

「別にいいけどどうしたの？」

ホールから戻った俺を呼びとめたは種島ぽふらさん。腰まであるぶつといポニー・テールに同じ年なのに俺の胸辺りしかない背丈という女性。

種島さんは俺を誰もいない休憩室まで連れ込んで扉を閉めた。

「あのね、伊波ちゃんと小鳥遊君の事なんだけど・・・」

「ああ、一人の仲の話？見守るしかないんじゃないかな、無理してくつつけようとしても小鳥遊君が無駄に怪我するしな」

「そりなんだよね、せめて伊波ちゃんがもう少し殴らない様になれば。でもでも伊波ちゃんも頑張ってるし・・・」

その分俺ら、主に小鳥遊君が血を流してるとこだね。

まあ要するに伊波さんが小鳥遊君に惚れているんだが小鳥遊君がそれに全く気がつかない上にちっちゃいものにしか興味がなく、伊波さんも伊波さんで男が近づくと殴っちゃうから全く進展しないと いう事でまわり（主に種島さんや相馬さん等）がやきもきしてると いうことだ。

「どつちこしるまづせめて小鳥遊君だけでも殴らなくなきやな。 そうすれば少しほ・・・・・・可能性は無きにしも非ずなんじゃ・・・

•
•
?

「それって可能性低いってことだよね！？」

— わたし?

と。それからしじみぐわせーわせーと口論をしていると休憩室のドアが開き中に黒髪の女の子、山田が入ってきた。

あれ！？この時間まだ誰も休憩時間じゃない筈じゃ！？」

お前また休憩時間じや ないたる

「そこの葵ちゃん？」

え、えーとそれは……」

「...」

ー
た、小鳥遊さん！？

今度は小鳥遊君が飛び込んできた。しかも肩を怒らせて手には段ボールを持っている。

「どうしたんだ小鳥遊君？」

あれ先輩に想影さん。いやこれ・・・・・

「ちよつ！小鳥遊さん駄目です！」

両手を広げて俺達と小鳥遊さんの間に入つた山田の襟を摘み上げてその段ボールの中を見ると、そこには大量の割れたり欠けたりしている食器類がギッシリと入つていた。これは・・・・・・・・

「山田、お前破損届けに名前・・・・・・・・書いてある筈ないよなー?」

そのまま摘み上げている山田を出来る限り持ち上げて振り動かしてた。これ弱い人だと吐いたりするが山田にはもう何回もやつていてせいで加減が分かり吐けない様に絶妙な力加減ができる様になつた。

「つえ・・・・・ちよ、想影さん止めウブ!」

「きやーーーー!想影君ストップ、葵ちゃん吐いひやーーー!」

「大丈夫、吐けないギリギリを保つてるから」

「いいですよ想影さんもつとやつてやつてくださいーーー!」

「あぶふふふ・・・・・・」

「葵ちゃんーーーん!」

十分後・・・・・・。

「う～まだ視界が揺れます」

「出来自得だ、山田ー。わざと破損届けに名前書いて来いー。」

「やうだぞ山田、俺だつて鬼じやない。わざと名前を書いてくればさつきのだけで罰は許してやう」

「ハイ！書いてきます」

脱兎の如く走り去る山田を見届け、俺と小鳥遊君は溜息を吐き、種鳥さんは苦笑いをした。

「アソツの不真面目な加減は筋金入りだな」

「もう山田の事はいいです。そろそろ混んでくる時間なので一人の事を呼びに来たんです」

もつそんな時間か。しみじみ思うけどなんでこんなテンジヤラスなファミレスに常連さんがいるんだろうか、あと地味に客数は土日多いし。

「想影さんー行きますよーーー！」

「ああ、了解ー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3607t/>

真剣で最終に恋してみろ！

2011年10月23日18時28分発行